

寄稿 若竹 千佐子 (作家)

歌にまつわる話

芥川賞に選ばれて

人生でさえ、不思議い
なものですねえ。今日は
朝から頭の中、美空ひば
りの歌が回転している。

歌のワンフレーズが頭
に浮かぶとそただけ延々
とエンドレスで流れ続け
て自分でも止められな
い。それで若い頃はほん
とに困った。

今でも覚えているのが
高校の学期末テスト。泉
に沿って繋るボダイジュ
。このフレーズがぼっ
と頭に浮かんで、一瞬自

分でも嫌な予感がしたの
だった。予感的中して
テストなのに一日中この
歌が脳内を流れ続けた。

おかげで、泉に沿って繋
る菩提樹の影で因数分解
をし、現代文の長文読解
をやる羽目になった。も
うやめてと涙目をお願い
しても、脳内の歌は終わ
らない。止まったのは五
時間目、テストが全部終
わってからだった。

対処しようにも人に相
談することもできない
し、そうしょっちゅう起
こることもないからま
あいいかということだ、
今に至っている。



芥川賞に決まり、笑顔で
記者会見に応じる若竹千
佐子さん—東京都千代田
区で16日夜、和田大典撮
影

この習性に長く付き合
ってみると、どうも何か
事が起こって心が動揺し
た時に、心の平衡を保つ
ために脳内が鳴るとい
うか騒ぐらしい。私の書い
た小説「おらおらでひと
りいぐも」が芥川賞など
と予想外というか予想以



上の事態が出来し、今
パニック状態の脳が右往
左往して、不思議いなも
のですね、を繰り返すの
に違いない。

とはいえ迎え撃つ私
も、昔の困った困っただ
けの私ではない、それな
りの年の功を積んで、終
わらない歌を何とか途切
れさすために会話に持ち
込むという手段を編み出
した、つまり脳内に話し
かけるようなことをす
る。

それでもだめなら、歌
には歌で対抗する。私も
負けずに歌うのである。
歌うのは私の場合、この
歌しかない。やるそれッ
ツゴ、見ておれガバチ
ョの歌だ。と、どうい
うことが起きるか、脳内も
同調して歌う。ついに一
斉に唱和。

そうならもう仕方
がない。最後まで付き合
うしかない。

もっともこの歌は私の
習性なんかよりもっと深
いところを流れる言って
みれば通奏低音、いつも
すぐそばにある歌の気が
する。正式名称は「ドン
・ガバチョの未来を信ず
る歌」。ひょっこりひょ
うたん島初代大統領ド
ン・ガバチョのテーマ
曲。今日がダメなら明日
にしましょ、明日がダメ
ならあさってにしまし
よ、あさってがダメなら
しあさってにしましょ、
どこまで行っても明日が
ある。

この歌を歌い過ぎてガ
バチョさんの心性私に乗
り移ったのか、今では私
は自他ともに認める大の
楽家で、心の中かなり
のおしゃべり。

「ひょっこりひょうた
ん島」が大好きだった。
自慢ではないが、ひょっ
こりで歌われた歌は今で
もほとんど誰んじてい
る。ニヒルなダンディの
口笛だって吹ける、かな。

あ頃。
ひょうたん島が始まっ
たのは小学校四年生のと
き、ちょうど東京オリ
ピックの年だった。家の
周りはまだ舗装されてい
なくて穴だらけで、雨が
降れば水たまり、晴れる
とそこに青空が映ってき
れいだった。小学生のこ
ろ、一日はとつともなく
長くて私はいつになっ
たら、大人になれるんた
ろうかと焦れて泣いた。

あれからもう五十年
超。わが心のドン・ガバ
チョを懐かしくエッセイ
に書く日が来るなんて夢
にも思わなかった。人生
でさえ、不思議いなもの
ですね。
(わかたけ・ちかこ)「お
らおらでひとりいぐも」
で第158回芥川賞